R7 楡木小学校　学校通信
No.１９
なりたい自分になる！
In 楡木サラダボウル
令和７年９月１２日
文責　余宮

いつまでたっても暑い！そんな中にも朝遊びは絶好調です。幾分、授業への集中力も上がったような感じが…

成長は本当に早い方がいいのか？

６年生体育の授業。とても楽しそうな声が聞こえてきました。何をやっているのかな？
「ね～ね～ね～…ねこ！！」という先生の声に合わせて、ねこ役がねずみ役を追いかけます。
さすがの瞬発力。さらに、次はねずみが追いかける。ねことねずみゲームの醍醐味は、頭文字の「ね」が同じだけに、お題の最後を聞くまで自分が追いかけるか逃げるかがわからないというギリギリ感。俊敏性に加え、攻守の交代を瞬時に判断する力も必要なゲームに、子どもたちは四苦八苦しながらも没頭していきます。

「先生が最初に言う『ね』の数で決まるような気がするなあ～」
と、新しい法則を見出そうとつぶやくかんたさん（仮名）。思考をいろんな場面に広げます。
逆に、足の向きを工夫することでゲームを攻略しようとするしずかさん。
「足をハの字にしておくと、追う―逃げる、どっちもいけんじゃない！！？」
と、再度ステップの構えでお題を待ちます。

彩のある学びの風景に、私は「人の学び」の本質を見たような気がしました。

生物学上の人（ヒューマン）は、動物の中では大変弱い存在であるといわれています。例えば馬。生まれて数時間もすれば立ち上がり、親の庇護がなくてもある意味生きていける。昆虫に至っては、生まれてすぐに自立。大変強い。

それに比べ、人は１年ほどでやっと立つ。本能的なコミュニケーションはできるにしても、言葉が出てくるのが１歳半くらいか。親がいなければ、生きてはいけない弱い動物です。

なぜだろう。

教育学者のジョン・デューイ※氏は、「成長が遅い」ということは、学ぶことにとってむしろ人だけがもつ素晴らしい特徴である、と述べられます。

人は圧倒的に社会的な生き物です。ただ、社会とはその時間軸の中で構成メンバーも大きく変わるし、だからこそ価値観も大きくうねる。これまで良いとされていたことも、本当に良いことなのかと問い直されていくこともしばしば。もともと、人は、複雑であいまい、不確かで変化するコミュニティーの中で生きているのですから。

だから、物事を多様にとらえ、多面的に考え、多角的に取り組まねばならない、という生来のミッションを抱えているのが人なのです。その生き方を支えるのが学びであり、自分の経験を単一にとらえるのではなく、じっくりと状況を見定め、あーでもない、こーでもないと試行錯誤しながら、時には立ち止まったりつまずいたりしながら実践し、大切な失敗を振り返り明日の糧にする。だから、成長を急がず、繰り返し試してみる余裕こそが重要なのだ、とデューイは言います。多様な思考にふける。成功も失敗も一緒くたの文化的成長を、さらなる未来へ送り続ける。ここに、人類の栄華の源がある、と。

半面、人以外の動物の指示は単一的になりがちです。「う～」とうなったら「逃げろ」こんな感じです。間違えようがない。結果的に、成長が早い（方がいい）となる。

なるほど、納得。

試行錯誤しながら、これまでの先達が気づかなかったことまで学び浸る子どもたち。そういう飽くなき挑戦が、これからの未来を培う確かな成長につながっていくのでしょうね。

※ジョン・デューイとは・・・教育学者でプラグマティズム（日本語では「実際主義」と訳される経験を重視する考え方のことです）を代表する思想家です。現在の日本の教育の教科書ともいえる「学習指導要領」に大きく影響している考え方を提唱している教育者です。実は、今回取り上げた話題に続けて、デューイは人の学びの本質の一つに「頼る（依存する）こと」をあげています。この話題は、いずれまた通信で取り上げてみたいと思います。